

第十二章 柏木の物語 源氏から睨まれる

[第一段 御賀の試楽の当日]

今日は、かかる試みの日なれど(今日はその試楽の日だったが)、御方々物見たまはむに(御夫人方が見学なさるので)、見所なくはあらせじとて(見応えのあるものにしないで)、かの御賀の日は(御賀当日の舞人は)、*赤き白椽に、葡萄染の下襲を着るべし(赤白椽の上着に葡萄染の下襲を着ることになっているが)、今日は、*青色に蘇芳襲(今日は青白椽の袍に蘇芳襲の下襲という衣装で)、楽人三十人、今日は白襲を着たる(楽人の三十人は今日は白襲を着ていて)、辰巳の方の釣殿に続きたる廊を楽所にて(東側の釣殿に続く廊下を楽座にして)、山の南の側より御前に出づるほど(舞人が築山の後ろ側から前庭に現れる時に)、「*仙遊霞」といふもの遊びて(仙遊霞という曲を演奏すると)、雪のただいささか散るに(雪が少しだけ散らついて)、*春のとなり近く(春が隣に近付いた)、*梅のけしき見るかひありてほほ笑みたり(梅の木の満を待す姿が際立って綻びかけていました)。*「赤き白椽(あかきしらつるばみ)」は「赤白椽(あかしらつるばみ)」のことで、色見本ではくすんだ桃色>に見える。舞人の袍の色らしい。「椽」は「つるばみ」と読むらしくくヌギまたはその実のドングリの古名>と大辞泉にあり、そのくドングリの実またはその殻を煮た汁で染めた色。灰汁(あく)媒染して薄茶色、鉄媒染して焦げ茶色や黒色に染める。また、その色の衣服。>ともある。が、「赤白椽」はドングリ染めではなく<古代・中世の染め色の名。茜(あかね)と櫛(はじ)とで染めた、赤に黄み加わった色。禁色(きんじき)の一。赤色(あかい)。>と大辞泉にある。「白椽(しらつるばみ)」は抑えた色調を示す言い方、かも知れない。*「あをいろ」は「青白椽(あおしろつるばみ)」の意味なのだろう。「青白椽」は<装束の色の名。染め色では、紫根(しこん)と刈安(かりやす)を染料として染めた灰色がかった黄緑色。織り色では、縦糸を青、横糸を黄として織った色をいう。青色(あおいろ)。>と大辞泉にある。色見本ではく白っぽい青ねず>だ。*「仙遊霞(せんゆうか)」は<雅楽の一。太食(たいしき)調の曲で舞がない。>と大辞林にある。仙人が遊ぶ霞、とは幽玄な趣き、なのだろう。*「春のとなり近く」の表現については、注に<明融臨模本、合点と付箋に「冬なから春のとなりのちかければ中かきよりそ花はちりく(け)る」(古今集誹諧歌、一〇二一、清原深養父)とある。>とある。「なかかき」は<隣との境の中垣>で、「花は散る」は<花が咲き始める>らしい。*「梅のけしき見るかひありてほほ笑みたり」は単に御賀の成功の予感に止まらず、物語り全体の、冬を乗り越えて春を待つ期待感、が感じられるが、事態は決して楽観できる状態とは思えない。源氏殿のある種の達観を示しているのだろうか。違和感と言うと偏狭な解釈の気もするが、少し不思議な印象のある文だ。

廂の御簾の内におはしませば(殿は廂の御簾の内にいらっしゃいまして)、式部卿宮(義父の式部卿宮と)、右大臣ばかりさぶらひたまひて(義理婿の右大臣だけが同席なさって)、それより下の上達部は簀子に(それ以下の高官たちは簀子に控え為さり)、わざとならぬ日のことにて(式典当日では無いので)、御饗応など(おんあるじなど、お持て成しの酒肴は)、気近きほどに仕うまつりなしたり(日常的なものを供してありました)。

右の大殿の四郎君、大将殿の三郎君、兵部卿宮の*孫王の君たち二人は、「*万歳楽」。まだいと小さきほどにて、いとらうたげなり。*四人ながら、いづれとなく高き家の子にて、容貌をかしげに*かしづき出でたる、思ひなしも、やむごとなし。*「そんわう」は<「孫王」は帝の孫の意。>と注にある。兵部卿宮は殿の弟宮だが、臣籍降下していないので宮家であり、財務実権は無いものの家格は高い。源君は大将にまで成っているが「孫王」ではないようだ。*「まんざいらく」は<雅楽。唐楽。平調(ひょうじょう)>

で新樂の中曲。舞は四人または六人の文(ぶん)の舞。唐の則天武後の作とも、隋の煬帝(ようだい)の作ともいい、めでたい曲とされている。鳥歌万歳樂。ばんざいらく。>と大辞泉にある。私は素養が無いから言葉の説明では、内容は全く分からない。が、幸いに四人舞いの YouTube 動画のアップがあった。仮面は無かった。また、この場面では源家の子孫繁栄ぶりを表わすためか、踊り手の子供の紹介およびその舞った各曲名が逐一明示されて、その面ではいつになく丁寧な描写だ。*「よたりながら」は<四人共に>。*「かしづき出でたる」は<面倒を見てもらって出て来た=装束をしっかりと着付けて舞った>。

また、大将の*典侍腹の二郎君、式部卿宮の*兵衛督といひし、今は源中納言の御子、「皇じやう」。右の大殿の三郎君、「*陵王」。大将殿の太郎、「*落蹲」。さては「*太平樂」、「*喜春樂」などいふ舞どもをなむ、*同じ御仲らひの君たち、大人たちなど舞ひける。*「ないしのすけばら」は侍妾の子。「典侍」は惟光の娘。五節の君だったのを源君が見初めたのは十二、三年前の滅君 12 歳頃のことだったかと思うが、二郎君が典侍腹ということは、太郎君と三郎君は正妻腹らしく、八年くらい前の源君と藤原姫との正式な結婚前には、源君は典侍との間に子を設けていなかったということになるようだ。あまり細かな厳密さをこの物語に求める気はそんなにはないが、此処で子供たちがいやに登場するので、子供といえども人間で飾り物の人形じゃないんだから、どうしても整合性は気になるが、今まで丁寧に説明されていない所為か、どうもしっくり腑に落ちない感じが残る。*「ひやうゑのかみ」は注にもあるが、藤袴巻三章二段に初めて説明された人で、「殿の上の御はらからぞかし」とあって、紫の上の異母兄に当たるらしい。注には<臣籍降下して源氏となっている。>とあり、藤家の嫁でも得たのか、中納言にまでなっているのだから、そこそこの財力は有りそうだ。「みこ」という言い方は一人息子なのだろうか。*「皇じやう」は「わうじやう」で「往生」に掛かる、と以前どこかで聞いたような。法事の終曲かと思えば、此処では早い演目らしく、パチンコ屋の蛍の光とは違うらしい。舞は今に伝わっておらず、曲の一部が残るのみとのことで YouTube 動画も無い。*「陵王(りやうわう)」は「蘭陵王(らんりょうおう)」のことで、今でも伝わる雅樂の代表的な舞曲とのことで、YouTube 動画もいくつかある。一人舞いで衣装も赤く派手で面も厳つい。なお、この動画が約 20 分で、当時のテンポも然程違わないとすれば、此処に示された六曲で正味二時間は掛かる。演目ごとに、褒め言葉やら歌詠みなどの座興が、これだけの列席者が集えば、面白く盛り上げられただろうから、その倍以上の時間があつという間に過ぎたことだろう。これぞ貴族の生活、の感がある。*「落蹲(らくそん)」は「納曾利(なそり、なっそり)」と同じ曲らしく、一人または二人で舞う、とのこと。また、「蘭陵王」への答舞ともあり、「蘭陵王」と「落蹲」が番の出し物ということらしい。「落蹲」「納曾利」共に動画アップがあり、衣装は青系統だが、面が無い。ただ、風俗博物館などの資料に拠ると面も青いぎよろ目で、童舞なので面が無い、ということらしい。とすると、三郎君の「陵王」も面が無かったのかも知れない。全ての可能性を内包する子供の顔に勝る面など有る筈も無い、か。また、それがために、無条件で存在主張が許されるのだろうか。*「太平樂(たいへいらく)」はその字面からして優雅でのんびりした舞曲かと思ったら、YouTube で天理大学雅樂部の動画を見ると、鎧兜の武官装束の四人舞いで剣は振るし矛は立てるで勇ましい。武力制圧して平和をもたらしたという戦勝舞踏なのだろうか。それが「太平」の真の意味だと主張しているとなれば、非常に勝れた見識だ。良く有り勝ちなく太平の長閑さ>は、実は、多大な犠牲の上に築かれた「太平」を貪っているだけの<怠惰>に過ぎない。無論、それを人が欲し、好む、ということは間違いないだろうが、「太平」の本質はそれが自然にあるものではなく、先人の努力と犠牲によって実現されたものであり、その維持にも多大な労力を要する、という社会組織の経営認識にこそあるのだろう。*「喜春樂(きしゅんらく)」は動画が見つからない。で、「雅樂的音楽研究書」サイトの「喜春樂」ページの挿絵と解説に頼ると、蛮絵装束の四人舞いとあった。「蛮絵(ばんゑ)」は<鳥獸・草花などの形を丸く図案化した文様。近衛の隨身の褐衣(かちえ)、舞樂の装束、調度などに用いられた。>と大辞泉にある。*「同じ御仲らひ」は<同族親戚>。

暮れゆけば(日が暮れてくると)、御簾上げさせたまひて(殿は廂の御簾を上げさせ為さって)、物の興まさるに(場の濃密さが増して)、いとうつくしき御孫の君たちの容貌、姿にて(とても可愛らしい御孫の子供たちの表情や姿で)、舞のさまも、世に見えぬ手を尽くして(舞の型にも普通には無い工夫が施されて)、御師どもも、おのおの手の限りを教へきこえけるに(お師匠たちもそれぞれの担当で技法は全てお教え申して)、深きかどかどしさを加へて(深い意味もよく理解して)、珍らかに舞ひたまふを(踊り手が見事に舞いなさるのを)、いづれをもいとらうたしと思す(どの子も感心にお思いになります)。

老いたまへる上達部たちは(年をお取りになった高官たちは縁側で)、皆涙落としたまふ(皆涙を落としたまふ)。式部卿宮も、御孫を思して、御鼻の色づくまでしほたれたまふ(式部卿宮も廂で御孫を健気にお思いになって噛んだ御鼻が赤くなるほどお泣きになります)。

[第二段 源氏、柏木に皮肉を言う]

主人の院(あるじのみん、六条院源氏殿が)、

「過ぐる齢に添へては(寄る年波に添えて)、酔ひ泣きこそとどめがたきわざなりけれ(泣き上戸は止められないものようだ)。衛門督、*心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや(衛門督がそんな私の老醜ぶりを見て他愛も無いとお笑いなさるのが真に情けない)。さりとも、今しばしならむ(しかし、直ぐに皆同じ目に遭うのさ)。*さかさまに行かぬ年月よ(誰も歳には逆らえない)。老いはえ逃れぬわざなり(老いは逃れられるものではない)」 *「心とどめてほほ笑まるる」は、殿の酔い泣きを<老人の涙もろさと理解して同情する>という意味だろうが、「心とどめて」は殿と衛門督の間では、衛門督が殿を老いぼれと見くびって密通を犯した、という意味を暗意することになる事情下なので、当事者以外に事情を知る者であるところの読者にそれぞれの思惑を想像させるという、正に思わせぶりの言い回しとなっている。 *「さかさまに行かぬ年月よ」の言い回しは、注に<「さかさまに 年もゆかなむ とりもあへず 過ぐる齢や とともに返ると」(古今集雑上、八九六、読人しらず)。>とある。「とりもあへず過ぐる齢や」は<成果が無かったのに努力した年月の長かったこと>だろうか。普通の後ろ向きの歌、という印象。

とて(と言って)、うち見やりたまふに(衛門督をちらっと御覧になるが)、人よりけにまめだち屈じて(人一倍畏まって苦悩して)、まことに心地もいと悩ましければ(本当に具合もとても悪そうで)、*いみじきことも目もとまらぬ心地する人をしも(この試楽の素晴らしい出来栄も目に入らず気が動転している衛門督を)、さしわきて(寄りに拠って)、空酔ひをしつつかくのたまふ(酔った振りであらういなさるのは、)。戯れのやうなれど(冗談めかしているが)、いとど胸つぶれて(衛門督はますます気が滅入って)、盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば(御酒を勧める注ぎ役が回って来るのも負担に感じられて)、けしきばかりにて紛らはすを(形ばかりで飲んだ振りをしている)、*御覧じ咎めて(殿が見咎めなさって)、持たせながらたびたび強ひたまへば(杯を置かせずに何度も無理強いなさるので)、はしたなくて(迷惑で)、もてわづらふさま(困っている衛門督は)、なべての人に似ずをかし(普通の人と違って風情が有ります)。 *「いみじきこと」は「物の興まさる」と形容された<この非常に面白い試楽>のこと、のようだ。「目も止まる」は<注意が向く、気が向く>。「いみじきことも目もとまらぬ」は<宴の賑わいも眼中にない>と、さらっと言ったようにも見えるが、「いみ

じ」という語の語感は分かり難い。 *「御覧じ咎めて」殿が衛門督が酒を無理強いするのも、傍目には親しさゆえの戯れなのだろう。が、読者には思わせぶりの書き方だ。

心地かき乱りて堪へがたければ(気分が悪くて我慢できないので)、まだことも果てぬにまかだたまひぬるままに(まだ宴も終わらぬうちにお帰りなさってそのまま)、いといたく惑ひて(とてもひどく思い悩みなさって)、

「例の、いとおどろおどろしき酔ひにもあらぬを(普段の度を越した深酔いでも無いものを)、いかなればかかるならむ(どうしてこんなに苦しいのか)。つつましものを思ひつるに(密通に気が咎めていたので)、気ののぼりぬるにや(緊張し過ぎたか)。いとさいふばかり臆すべき心弱さとはおぼえぬを(それほど臆病な気弱さとは自覚が無かったが)、言ふかひなくもありけるかな(情けないものだ)」

とみづから思ひ知る(と我が身を思い知らされます)。

しばしの酔ひの惑ひにもあらざりけり(一時の悪酔いではなかったのです)。やがていといたくわづらひたまふ(そのままとてもひどく体調を崩しなさいます)。大臣、母北の方思し騒ぎて(衛門督の父母は心配なさって)、*よそよそにていとおぼつかなしとて(別居では様子が分からないということで)、*殿に渡したてまつりたまふを(実家にお戻し申しなさるのを)、女宮の思したるさま(引き離されなさる妻の女二の宮のお気持は)、またいと心苦し(それはそれでまたとても情けない)。 *「よそよそにていとおぼつかなしとて」は注に<別々に住んでいたのでは気掛かりでならない、の意。太政大臣の長男である柏木は妻の落葉宮邸に住む。婿入り婚の生活をしている。>とある。藤原家の惣領らしからぬ印象だが、基本的な衛門督の生活感がどうも今ひとつ分からない。 *「殿に渡したてまつりたまふ」は注に<柏木を実家に引き取って看護しようとする。>とある。衛門督兼中納言藤君は32歳くらいかと思われる。どうも今ひとつ分からない。

[第三段 柏木、女二の宮邸を出る]

ことなくて過ぐす月日は(こういうことも無しに過ぐす女二の宮との毎日は)、心のどかに*あいな頼みして(呑気に当然のものと思って)、いとしもあらぬ御心ざしなれど(特には大事に思っていなかった女二の宮への御愛情だが)、*今はと別れたてまつるべき門出にやと思ふは(これが最後の別れになるかも知れないと思うと)、あはれに悲しく(神妙に感じ入って)、後れて思し嘆かむことのかたじけなきを(自分に先立たれてお嘆き為さるいたわしさを)、いみじと思ふ(衛門督は深く思い遣ります)。 *「あいなだのみ」は<根拠の無い期待>みたいな語感だが、女二の宮との平穏な日々を<空気のような当たり前のものに思って大事に考えなかった>ということなのだろう。 *「今はと別れたてまつるべき門出にやと」の言い回しは、注に<「かりそめの行きかひ路とぞ思ひ来し今は限りの門出なりけり」(古今集哀傷、八六二、在原滋春)。>を引くものと参照指摘がある。この歌は以前にも引かれていたかと思うが、「行き交ひ路」と「甲斐路=甲州路」が洒落で掛けてあって、その軽妙さが「今は限り」に際しての気風の良い達観を思わせるのか、それさえも生活に馴染んだ日常的な言い回しだったのか、よく使われた言い方のようだ。

母御息所も(同居の宮の母御息所も)、いといみじく嘆きたまひて(とても深く嘆きなさって)、「ははみやすどころ」は注に<女二の宮の母一条御息所。>とある。七章一段の、衛門督が女二の宮を娶った行に「下

臆の更衣腹におはしましければ、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり」とあつたので、この母御息所はせいぜい大納言家くらいの出だったのだろう。大臣家藤原殿から見れば格下で、藤君も御し易いと思つたらしい。つまり、この宮家としては藤君が生活財務上の頼りだったワケだ。

「世のこととして(世の習いとして)、親をばなほさるものにおきたてまつりて(親は親として敬い申し上げるにしても)、かかる御仲らひは(こうした御夫婦関係は)、とある折もかかる折も(どんな時でも)、離れたまはぬこそ例のことなれ(離れなさないのが普通です。)、かく引き別れて(このように引き分かれて)、たひらかにものしたまふまでも過ぐしたまはむが(平癒なさるまで大臣邸でお暮らしなさるのは)、*心尽くしなるべきことを(宮が気疲れになってしまうので)、しばしここにて、かくて試みたまへ(暫く此処で様子を見て下さい)」 *「こころづくし」は<気遣い>だろうが、「心尽くしなるべき」は<様子が分からないので余計に気を回して)気疲れしてしまうこと>くらいの語感。主語は宮だろうが敬語は無い。と言って、母御息所自身の都合では説得力に欠けそうだ。

と、御かたはらに御几帳ばかりを隔てて見たてまつりたまふ(とお側で御几帳で隔てただけの気近さで衛門督を看病申し上げなさいます)。

「ことわりや(ごもつともです)。数ならぬ身にて(臣下の身で)、及びがたき御仲らひに(及びも付かない王女とのご結婚を)、なまじひに許されたてまつりて(生意気な気負いながらお許し頂き申し上げて)、さぶらふしるしには(お仕えするからには)、長く世にはべりて(長く朝廷にお仕えして)、かひなき身のほども(臣下なりに)、すこし人と等しくなるけぢめをもや御覧ぜらるる(少しは人並みの身分になって豊かな暮らしをさせ申して御覧に入れよう)、とこそ思うたまへつれ(と存じておりましたが)、いとみじく(とても切実に)、かくさへなりはべれば(これほどの病態になりましたので)、深き心ざしをだに御覧じ果てられずやなりはべりなむと思うたまふるになむ(宮のご好意にお報い申したい私の深い誠意すらご理解頂けずに終わるのかと存じますと)、とまりがたき心地にも(生き永らえられない気がするにつけても)、え行きやるまじく思ひたまへらるる(とても死に切れなく存じられます)」

など(などと衛門督は応えて)、かたみに泣きたまひて(互いにお泣きになって)、とみにもえ渡りたまはねば(直ぐには実家にお戻りなさないので)、また母北の方、うしろめたく思して(今度は母北の方が不安にお思いになって)、

「などか、まづ見えむとは思ひたまふまじき(どうして直ぐ私に会おうとはお思いなさないのか)。われは、心地もすこし例ならず心細き時は(私は気分が少しいつもと違って心細い時は)、あまたの中に、まづ取り分きてゆかしくも頼もしくもこそおぼえたまへ(多くの子供たちの中でも先ず取り分けあなたに会いたくて頼りに思うのに)。かくいとおぼつかなきこと(まだ会えないとは、この何ともどかしいこと)」

と恨みきこえたまふも(と不満を申されるのも)、また、いとことわりなり(またそれは当然のことなのでした)。

「人より先なりけるけぢめにや(私が最初の子供の所為か)、取り分きて思ひならひたるを(特別に大事に育てられて)、今になほかなしくしたまひて(母は今でも愛していらして)、しばしも

見えぬをば苦しきものにしたまへば(少しでも会えないと辛くお思いなので)、心地のかく限りにおぼゆる折しも(私の体調がこのように最後かと思える時には尚更)、見えたてまつらざらむ(お会い申し上げないのは)、罪深く、*いぶせかるべし(罪深く申し訳無いことなのです)。 *「いぶせし」は<気が澄まない、心が晴れない>。「べし」は<事柄の性質からする当然の推移>を示す助動詞で、この終止形の言い切りはその事態を説明する「べきことなり」の強調語用。

今はと頼みなく聞かせたまはば(私がいよいよ最期とお聞きなさいましたら)、いと忍びて渡りたまひて御覽ぜよ(そっと大臣邸に会いに来て下さい)。かならずまた対面賜はらむ(必ずもう一度お会い頂きたい)。あやしく*たゆくおろかなる本性にて(ぼんやりで気が回らず至らない私の性分の所為で)、ことに触れておろかに思さることありつらむこそ(何かにつけて不満にお思いの事があつたらうと)、悔しくはべれ(悔やまれます)。かかる命のほどを知らで(このような短命が自分の人生とは思わず)、行く末長くのみ思ひはべりけること(呑気に思っただけで怠惰にかまけていたものです) *「たゆし」は<弛い、緩慢だ、間が抜けている>。

と(と衛門督は宮に別れを告げて)、泣く泣く渡りたまひぬ(泣く泣く大臣邸にお戻りなさいました)。宮はとまりたまひて(宮は後に残されなさって)、言ふ方なく思しこがれたり(言いようもなく衛門督を思い焦がれなさったのです)。

[第四段 柏木の病、さらに重くなる]

大殿に待ち受けきこえたまひて(大臣邸では衛門督を待ち受け申しなさって)、よろづに騒ぎたまふ(看護体制の万全を期して女房たちが立ち働き、荘厳な祈禱が行なわれます)。さるは(衛門督の病態は)、たちまちにおどろおどろしき御心地のさまにもあらず(直ぐに危篤に陥るようなことはなく)、月ごろ物などをさらに参らざりけるに(数ヶ月と食事をさらに召し上がらないので)、いとどはかなき柑子などをだに触れたまはず(ほんのちょっとしたミカンの一房さえ手に取りなさらず)、ただ、やうやうものに引き入るやうに見えたまふ(ただ次第に靈氣に引き入れられるように見えなさいます)。

さる時の有職の(この当代の有能朝臣が)、かくものしたまへば(こうして病床に伏せていらっしやれば)、世の中惜しみあたらしがりて(宮廷中が惜しみ残念がって)、御訪らひに参りたまはぬ人なし(お見舞いに参上なさない人はいません)。

内裏よりも*院よりも(帝からも朱雀院からも)、御訪らひしばしば聞こえつつ(見舞いの使者は度々遣わされては)、いみじく惜しみ思し召したるにも(非常に惜しんで下され為さるにも)、いとどしき親たちの御心のみ感ふ(ますます両親の嘆きは深まります)。 *「院」は朱雀院か冷泉院か、その双方か。実際には双方からあつたように思えるが、複数の書き方はしていない。藤君は冷泉帝からも重用されていたので判じ難いが、物語上での人間関係の濃さから見て、此処は朱雀院と読んで置く。

六条院にも(六条院源氏殿に於いても)、「いと口惜しきわざなり(まことに残念なことだ)」と思し*おどろきて(と意外に思いなさって)、御訪らひにたびたびねむごろに(お見舞いに度々丁寧に使者を遣わせなさり、)*父大臣にも聞こえたまふ(旧友の藤原殿にも御見舞い申し上げなさいます)。大将は(大将源君は)、ましていとよき御仲なれば(まして衛門督藤君本人と旧友なので)、

気近くものしたまひつつ(実際に直接見舞いなさっては)、いみじく嘆き*ありきたまふ(非常に嘆いて行き来なさいます)。*「おどろく」の語感が難しい。何を如何<驚くのか>が複雑だ。分からないので<意外に思う>で逃げる。*「ちちおとどにも」の「にも」について、注には<係助詞「も」同類の意。柏木はもちろん父大臣にも、の意。>とある。だとして、「ねむごろに」に読点を置くべきに思える。*「ありく」は「歩く」で<動き回る>。源君は実際に、自ら頻りに藤君を見舞ったのだろう。

御賀は(朱雀院の五十賀は)、二十五日になり(押し迫った年末の二十五日になってしまいました)。かかる時の(このような時の)やむごとなき上達部の重く患ひたまふに(権勢家の指導者が重く患いなさって)、親(親の大臣や)、兄弟(はらから、兄弟の高官たち)、あまたの人びと(郎党の役職者たち)、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて(その御親戚の各貴家が嘆いて意気消沈していらっしゃる頃合で)、ものすさまじきやうなれど(折り合いの悪いようだが)、次々に滞りつることだにあるを(次々と延期されて来たことでもあり)、さて止むまじきことなれば(このまま止めて良いことでも無いので)、*いかでかは思し止まらむ(どうして中断できなされましようか)。*「いかでかは思し止まらむ」は注に<語り手が、源氏の心中を忖度した表現。>とある。これを「女宮の御心のうち」とは取れないのかと考えたが、やはり是は文末の言い方らしい。

女宮の御心のうちをぞ(密通相手の衛門督の重篤と九ヶ月になろうという身重の御自分の体調と殿への罪悪感とで、父院の五十賀を晴れやかにはお祝い申し為されないであろう姫宮の御心中を)、いとほしく思ひきこえさせたまふ(殿は思い遣り申しなさいます)。「女宮の御心のうちをぞ」は唐突で不親切な文、に私には見える。衛門督の重篤を語る上文だけを受けるには、姫宮は余りにも複雑な事情を抱えている。概略は補語したが、宮自身が今の状況を如何考えているのかは、ほとんど説明が無い。にも関わらず、「いとほしく思ひきこえさせたまふ」という中身を示さない言い方で<殿が宮を思い遣った>ことだけを知らせて、これで説明が出来ていると考える作者の感性が私には分からない。当時の現代語文で、当時の生活感の中にいる読者なら意味が通じたのだろうか。

例の(入道の五十賀では恒例の)、五十寺の御誦経(王家に縁深い五十の寺で有難い読経が唱えられ)、また(そして)、かのおはします御寺にも(院の帝が入山していらっしゃる御寺に於いても)、*摩訶毘盧遮那の(まかびるさなの、大日如来の有難い説法の読経の音が響き渡ります)。*「摩訶毘盧遮那の」は注に<『集成』は「こうした中断の形で擱筆したとするのが古来の通説であるが、この帖の終りの一葉が何らかの事情で失われた可能性もあろう。次の柏木の巻の末尾にも同じような状況がある」と注す。>とある。「摩訶毘盧遮那」は「盧遮那仏(るしゃなぶつ)」とも略される「大日如来」のことらしく、「大日如来」は真言密教の根本仏とのこと。全く分からないが、有難い説法とされているものなのだろう。これが、言い差した形で終わる巻末なのか、以下が散逸したのか、私が知る由は無いが、これが本来の巻末だとして、その荘厳な読経の響きの中に清濁併せ呑んで進んでゆく時代のうねりを思うのも悪くはない。こういう客観視観を持ち出すには、梵語のような外国語は便利だ。

(2012年6月20日、読了)